ナチュラル・ペダゴジー理論の行方

中尾　央
南山大学人文学部人類文化学科・人類学研究所

本論に入る前にまず、評者はナチュラル・ペダゴジー理論を批判する論文を出版しており[1,2]、この理論にはかなり懐疑的な立場をとっていることを述べておきたい。

さて奥村・鹿子木論文であるが、ナチュラル・ペダゴジー理論に関する各種の実証研究とその問題点が手堅く、そして明快にまとめられており、この理論を踏まえて今後研究を進めていこうとする研究者にとっては非常にありがたい論考となっている。大筋で本論文での議論には評者も特に異論はない。そこで、本コメント論文では以下の2点について論じたい。まず(1)過剰模倣(over-imitation)についてほとんど触れられていない点、(2)本論文での主張がナチュラル・ペダゴジー理論にどのような含意をもつか、である。

まずは過剰模倣についてである。過剰模倣は実験者の非合理的な行為を模倣してしまう行動であり、明示シグナルを送った際に顕著に現れる行動として知られている[1,3]。この行動が各種実験でみられることがナチュラル・ペダゴジー理論を支える一つの重要な証拠と考えられてきた一方、近年では明示シグナルを送っても過剰模倣がみられないケースが指摘されるなど、いくつか矛盾するような証拠も得られている[4]。このように、過剰模倣の取り扱いはナチュラル・ペダゴジー理論の今後を考えるうえで必須の行動であると考えられる。奥村・鹿子木論文がナチュラル・ペダゴジー理論を軸とした論考である以上、この過剰模倣、そしてそれを巡る各種の議論についてはもう少し触れておくべきであったかもしれない。

次に奥村・鹿子木論文がナチュラル・ペダゴジー理論に対してもつ含意である。第7節において著者たちは「乳児が本当にコミュニカティブな意図を理解したかどうかの実証的証拠は乏しい」(p. 46)と述べる。評者もこの点は同意する。しかし問題は、乳児が明示シグナルからなんらかのコミュニカティブな意図を理解するという点こそがナチュラル・ペダゴジー理論の基礎になっているという点である[1,3]。したがって、もし著者たち(そして評者)の主張が正しければ、現時点でナチュラル・ペダゴジー理論の主張はもっとも重要な部分の実証がなされていないということになってしまう。もちろんこれは今後の検証次第で克服可能な問題かもしれないが、ナチュラル・ペダゴジー理論にとってはかなり大きな問題点であることには変わりない。もしこの理論がなんらかの形で生き残っていくとすれば、このもっとも大きな問題を克服することが第一に求められるだろう。

文献

[1] Nakao, H. and Andrews, K.：Ready to learn or ready to teach：A critique to the natural pedagogy theory. Review of Philosophy and Psychology 5(4), 465-483(2014).

[2] 中尾央：人間進化と二つの教育：人間進化の過程において教育はどのような役割を果たしたか.『現代思想』5月号, 188-197(2016).

[3] Csibra, G., & Gergely, G.：Natural pedagogy. Trends in Cognitive Sciences 13, 148-153 (2009).

[4] Schleihauf, H.：Why do we imitate nonsense? The underlying motivations of overimitation. Ph.D. dissertation submitted to Heidelberg University (2018).

自然なインタラクション状況下における明示シグナルの役割

平井　真洋
自治医科大学医学部先端医療技術開発センター脳機能研究部門

奥村・鹿子木論文は、近年注目されている乳児学習の一つの理論であり、社会学習理論の一つである「ナチュラル・ペダゴジー理論」を取り上げ、その機能についてこれまでの研究を概観し、筆者らの最新の研究を含め、体系的に紹介している。氏の論文では、明示シグナルの一つであるアイコンタクトに着目し、氏の一連の研究をコンパクトに紹介したうえで今後の課題・応用まで丹念に網羅した論文である。

今後の研究において検討すべき点は氏の論文中にも触れられていることも含め、4つあると考える。一つ目は、本文中で触れられている明示シグナルはアイコンタク